

Changing Faces of Queen Guenevere: An Interpretation of William Morris' *The Defense of Guenevere against Malory's Portrait*

岩尾 薫



論文の目的

トマス・マロリーがかいた『アーサー王の死』(「ランスロットと王妃」、「アーサー王の死」)におけるグウィネヴィア像と、ウィリアム・モリス著の『グウィネヴィアの弁明』におけるグウィネヴィア像を分析、比較する。

また、2つの作品が書かれた、中世とヴィクトリア朝のイギリスの女性像についても調査し、グウィネヴィア像がそれぞれの女性像に与えたと考えられる影響について考察する。

中世、ヴィクトリア朝の女性たち

中世の貴婦人：宮廷風恋愛において、愛の対象として理想化、神聖化される
ヴィクトリア朝初期の女性：「家庭の天使」であることが理想、家庭に従属する存在、
ヴィクトリア朝後期の女性：ニューウーマンの出現

グウィネヴィア像の比較、考察

『アーサー王の死』におけるグウィネヴィア像 二面性を持つ

嫉妬深い、独占欲が強い、単純、感情の起伏が激しい、プライドが高い、幼稚、わがまま、ヒステリック

冷たい態度のランスロットに対して

“a false recreant knight”(p.404, ll.20-21), “a common lecher”(p.404, l. 21) 侮辱、暴言

“And look thou be never so hardy to come in my sight; and right here I discharge thee this court, that thou never come within it, and I forfend thee my fellowship, and upon pain of thy head that thou see me nevermore” (p.404, ll. 23-26). 怒り、冷酷さ

<一方で>

依存、純粋、無垢

ランスロットとの密会発覚場面

“I would not doubt but that ye would rescue me, in what danger that I ever stood in” (p.471, ll. 34-35).

“I will never live long after thy days” (p.472, ll. 17-18).

窮地に陥ると必ず助けを求める、ランスロットへの愛が全て、

アーサー王の死 ターニングポイント

修道院に入り、全てを捨て改心して生きることを自ら決心する

アーサー王への罪悪感、改心への強い決意

グウィネヴィアの成長

- ・ランスロットへの態度の変化(皮肉、拒絶)
- ・幼稚な女性、宮廷風恋愛における愛の対象
- 自立した女性(アイデンティティーの確立)

- マロリーの救済方法
- ・アイデンティティーの確立
 - ・グウィネヴィアとラーンスロットとの関係は、モラルに反さない
(彼らの関係について詳細な説明は避ける、徳高い真の愛に生きた女性としてグウィネヴィアの死を“good end”にする)
“she lived she was a true lover, and therefore she had a good end” (p.404, ll. 24-25).

『グウィネヴィアの弁明』におけるグウィネヴィア像

強い女性としてのグウィネヴィア像

挑戦的態度、勇敢さ、自信、

私的なグウィネヴィア像(プライベートな面)

欲望、意志、本能のままに生きる、むき出しの感情、官能的・情熱的な魅力、人間味あふれる、

- 1人の生きた女性としてラーンスロットを愛する
(名誉、立場、名声などの抑圧的なものから解放される)

グウィネヴィアの成長

公的な女王	私的な一人の女性
(アイデンティティーの確立)	

- モリスの救済
- ・自立した強い女性として描く(アイデンティティーの確立)
 - ・私的なグウィネヴィア像 読者の共感、愛着の気持ちを誘う
 - ・グウィネヴィアとラーンスロットとの関係は、法やモラルでは裁くことのできない、崇高で次元の違う世界にあると考える
(結末を曖昧にする事で明確な判断を出さず、読者に判断を委ねる)

Conclusion

アイデンティティーを確立し自立したグウィネヴィアは、それぞれの時代の女性たちにとって、進歩的、革新的な新しい女性像である。